

# トキを守る

市田 則孝さん

バードライフ・インターナショナル 副会長

世界的に絶滅が危惧されているトキは、中国と日本がそれぞれに、人工繁殖による野生復帰を進めてきました。私たちがなぜトキを守るのか。それはトキが減ったのは自然環境が変化したから。環境を変化させた一因は、農業や開発など、豊かさを求めてきた私たち人間の生活とも深いかわりがあるのです。

トキを野生に返すには、高い繁殖技術に加え、生息環境を守るためにいかにして地域の人々と調和させていくかがカギとなります。日本では佐渡の取り組みが注目すべき事例として挙げられます。農業の使



40年以上、国内外で鳥類の保全活動に取り組む市田さん。「トキが美しく飛び立つ姿は、いつ見ても感動します」

用が制限され地元の農家はとても苦勞したのですが、住民同士が知恵を出し合ったことで「トキ米」というブランドが誕生。これが今では、地域再生に大きく貢献しています。

中国で始まったJICAのトキ保全プロジェクトが目指すのも「人とトキが共生できる地域環境づくり」。中国の繁殖技術と日本の地域づくりの強みを合わせれば、アジア型環境保全が実現できると信じています。



ゴリラ研究を始めて30年の山極先生。「ゴリラは神経質で人間を怖がるので、何十年もかけて信頼関係を築いてきました」

ゴリラといえば動物園で見るもの、というイメージがかもしれませんが、アフリカの森には野生のゴリラが生息しています。しかし、伐採や紛争による森林破壊、エボラ出血熱の流行などが原因で大幅に減少し、絶滅の危機に立たされています。また、野生生物による農作物被害や観光による収益をめぐり、政府や国際保護団体と地域住民との間に軋轢が生まれ、保護活動の障害にもなってきました。

私たち先進国の役割は、地元の研究者を育て、彼らとともに現地のニーズに合った保護活動を進

# ゴリラを守る

山極 寿一さん

京都大学大学院理学研究科教授

めていくこと。私はこれまで、ルワンダ、コンゴ民主共和国、ガボンの研究者たちと、科学的データを収集しながらゴリラの保護に取り組んできました。

現在、JICAが京都大学を中心とした日本の研究者グループと協働で実施している研究もその一つ。ガボンの国立公園で野生動物の生息状況を調査し、「地域の資源」として生かす方法を考えています。今後、住民主導のエコツーリズムなどにより、将来的にゴリラと人間がうまく共存できるような基盤を整えていきたいと思っています。

# 里山を守る

山川 勇一郎さん

NPO法人ホールアース研究所 自然ガイド



JICA中部「持続的開発のための環境教育」でコースリーダーを務めた山川さん。「自然体験型環境教育」のノウハウを伝えている

昔の日本は、ご飯を炊くにもお風呂を沸かすにも木が必要で、燃料を調達しながら、定期的に森の手入れをしてきました。そして「里山」は守られ、生物多様性が維持されてきましたが、生活が便利になり人々が森に入らなくなった今、里山は荒れ放題。富士山麓の里山は、生物にとっても、人間にとっても、居心地の良い場所ではなくなってしまいました。

しかし、他の地方同様、富士山周辺でも高齢化が進み、自力で里山を守るのが難しい。そこで今、私たちが取り組むのが、全国から若者を集めて竹林を再生させる活動。また親子向けに、田んぼの作業体験などを通じた環境教育も行っています。

里山の根本にあるのは、自然と人間が対立軸にある西洋的な考え方ではなく、「人間と自然が共生する」という思想です。こうした日本古来の自然観に根差したアプローチを途上国の人々に伝え、彼らが自分たちなりにそれを吸収し、自国に合った自然環境保全の取り組みを実践してほしいと願っています。



# ヒマラヤを守る

尾鷲 愛美さん

青年海外協力隊(環境教育)

私が活動するネパール中部のポカラ市は、ヒマラヤ山脈を一望でき、川、湖、洞つなどの自然資源に恵まれています。トレッキングの拠点にもなっていることから、世界各国からたくさんの観光客が訪れます。

しかし最近、人口増加で生物のすみかが奪われたり廃棄物で川が汚染されたりと、美しい自然が失われつつあります。地元の人からは「排気ガスでヒマラヤの景色が見えなくなった」と嘆く声も聞かれます。一方で、自然の恵みだけが頼りだったこれまでと違い、何でも便利に手に入るようになった今、自然を

思いやる心が薄れてしまっているのも事実。そこで私は、環境意識を高めてもらうため、地域の女性グループに生ごみのたい肥化やエコバックの利用、小学生には環境教育を促進する活動をしています。

生活習慣を変えるには時間がかかります。それでも少しずつ、町の人たちが環境保全の必要性に気づき、彼ら自身の手で一日も早く、この町にきれいな景色を取り戻してほしいと願っています。



地域の女性グループに、エコバックについて説明する尾鷲さん。「自治体や学校、NGOや観光業など、さまざまな分野の人たちとの連携が大切です」



# 湿地を守る

新庄 久志さん

釧路ウェットランドセンター 主任技術委員

世界四大文明がすべて水辺で生まれたことから分かるように、人間は古くから湿地の恩恵を受けてきました。釧路湿原も長年にわたって、食料など私たちが生きるために不可欠な資源を与えてくれたのです。

しかし、今でこそタンチョウが生息するなど貴重な生態系で有名な釧路湿原ですが、1960年代以降は土地開発で湿原の一部が姿を消し始め、生物の生息地も失われていきました。今まで当たり前にあったものが失われて初めて、釧路の人たちは湿原の

価値に気付いたのです。

湿原の命である水はもちろん、生息する水生生物や水鳥などを保護しながらワイズユース(賢明な利用)するアイデアは、地元の人たちから生まれました。エコツーリズムで人気のカヌーは漁師、乗馬は農家からの発案です。苦い経験を経て現在に至った釧路の経験は、途上国にも役立つはず。逆に、釧路の取り組みに対する彼らの新鮮な視線は、私たちがより良い保全活動をしていくための貴重なアイデアにもなっています。



新庄さん(左)は10年以上、JICAの生物多様性関連の研修に協力。途上国の研修員たちに、日本の湿原の活用方法を伝えている



特集  
大切にしたい  
生命の豊かさ  
—私たちの選択

# “地球上の仲間” を守る人

自然界の動植物も、私たち人間も、共に“生物多様性”の一員。  
今、地球上の至る所で危機に直面する“仲間たち”を守るために奮闘する日本人がいる。